日本医史学雑誌　第68巻第3号（2022）　221–229

空海の医療記述

戸部　賢，齋藤　繁

群馬大学大学院医学系研究科 麻酔神経科学分野

受付：令和3年12月9日／受理：令和4年4月11日

要旨：高野山大学密教文化研究所により平成3年に刊行された『定本 弘法大師全集』では，空海の著作物を合計55点に整理している．その中には，宗教思想的記述における比喩的記載として医学，薬学等を記した部分が60箇所，具体的な薬や施術，栄養管理等を記した部分が46箇所ある．空海は当時の医学，薬学，保健学の健康管理，健康長寿に関する効能を，十分に信頼するに足りると考えていたと想像され，宗教上の講話の例え話として頻繁に用いたことが著述から伺える．しかし，空海自身が全国を回って医療や保健の知識を啓蒙したという確かな証拠は存在せず，そうした伝説は，空海の密教思想を後継した高野聖や山岳修験者の活動に由来すると考えられる．

キーワード：空海，弘法大師，真言宗，密教，高野聖

1. はじめに

本邦において真言宗の基盤を作り，高野山を開山した空海は，宗教家としての活動だけではなく，芸術，政治の各分野においても広範な活動を行なったとされている[1]．また，多くの慈善事業，地域振興に参画したことが伝えられており，日本各所に「弘法」の名のついた山，湧水地，温泉がある．国土地理院の地図上でも27箇所の記載がある．地形図に記載されていないものは遥かに多いと考えられ，各所で地元住民間の通称として「弘法の……」といった名称は広く使用されている（表1）．薬草の知識が豊富であったという逸話もあり，弘法大師　空海は全国を行脚して，大自然の営みの生命観や健康管理法を啓蒙した偉人と捉えられている[2]．しかし，空海の著述として文献学上確立されている文献のほとんどは仏教の哲学的，宗教学的記載，もしくは詩歌や書道書などの芸術関係であり，医学，保健学，薬学的な具体的記述が広く知られているわけではない．そこで，高野山大学密教文化研究所により整理，検証された空海自身の著作，講話記録から，医療，保健に関する記述を抜粋し，医学的見地から内容別に整理することで，空海の医療に関する知識，考え方を洞察した．また，空海の実際の行脚地は近畿と四国エリアであって，中国への留学の帰途に五島列島から九州を経たことを除けば，東日本を含めた日本全体を空海本人が歩いたという事実は証明されていない[2]．確立した史実と民間伝説とで大きな乖離が生じた原因も考察した．

なお，著者らは重症感染症患者等の治療を専門とする臨床医であり，人工呼吸器や人工肺，血液濾過透析等を用いた治療によっても救命し得ない多くの症例を経験する中で，診断・治療技術が非常に限られていた時代において空海や周囲の人々がどのように感染症を代表とする疾病や救命困難な症例と向き合っていたかに興味を持ち，その概要を公開されている資料をもとに整理・考察している．従って，以降の記述内容は歴史研究を専門とする立場からの新資料発見や日々進展する歴史研究の報告に該当するものではない．

2. 空海の生涯[3,4]

空海は奈良時代末の宝亀5年（774年），現在の

表1　空海ゆかりの地とされる「弘法」の名がついた国土地理院地図上の27地点

山や森系統	弘法山	福島県会津若松市
		神奈川県秦野市
		埼玉県越生市
		広島県三次市
	弘法岳	長崎県佐世保市
	弘法岩	福島県西会津町
		群馬県沼田市
	弘法杉	和歌山県田辺市
水系統	弘法清水	岩手県盛岡市
		新潟県上越市
	弘法川	長野県青木村
	弘法浜	東京都大島町
	弘法沼	福島県南会津町
	弘法浦	長崎県対馬市
	弘法担	福島県須賀川市
	弘法橋	北海道美唄市
寺社・遺跡系統	弘法寺	三重県亀山市
		香川県坂出市
		岡山県瀬戸内市
	弘法大師堂	広島県呉市
		福島県南会津町
	弘法大師の像	愛知県蒲郡市
	弘法大師廟	和歌山県高野町
	弘法古墳	長野県松本市
自治体住所名	弘法	宮城県東松島市
		長野県青木村
	弘法町	愛知県知立市

国土地理院地図での「自然地名」の取り扱い：地元の地方公共団体からの表示希望申請を受け，自然地名の場合，「主要なもの」と国土地理院が判断した場合に注記（表示）する．ただし，他の表示事項と錯雑してしまう場合には省略する．

四国香川県善通寺市で地方役人（郡司）の家に生まれる．幼名は真魚（まお）とされ，延暦8年（789年），15歳で平城京に上る．上京後は佐伯今毛人が建てた佐伯院に滞在し，桓武天皇の皇子伊予親王の家庭教師であった母方の叔父である阿刀大足について論語，孝経，史伝などを学ぶ．延暦11年（792年），18歳で大学寮（式部省）に入るが，そこでの勉学に飽き足らず19歳を過ぎた頃から山林での修行に入る．24歳で儒教・道教・仏教の比較思想論でもある『聾瞽指帰』を著す．沙門勤操もしくは大安寺の戒明より「虚空蔵求聞持法」を授かり，阿波の大瀧岳や土佐の室戸岬の御厨人窟で修行する．御厨人窟の修行で悟りを開き，その時目にしていたのは空と海だけであったため，空海と名乗る．僧侶として31歳の延暦23年（804年）に東大寺戒壇院で得度受戒し，同年7月6日，今の長崎県田浦から遣唐使船で唐に渡る．往路では暴風雨に遭い難破し，34日間の漂流の後，福州付近（赤岸鎮）に漂着する．同年12月に苦労の末，首都長安に着き西明寺に逗留し勉学に努める．翌年5月青龍寺の恵果和尚を尋ね，正嫡弟子として密教の教えを受ける．恵果和尚入寂にともない，空海は「恵果和尚碑文」を書した後，33歳の秋に帰国する．

大同元年（806年）10月，九州に到着後，筑紫観世音寺に逗留する．大同4年（809年），嵯峨天皇命により上京し，高雄山寺に入住する．高雄山寺に入った空海は，ここで真言密教を流布し国家安泰の祈祷を修する．その後，密教の伝道者として歴代天皇の篤い帰依を受けるようになる．真言宗の根本道場として東寺を下賜され，43歳の弘仁7年（816年）には高野山を開山する．

空海は唐で集めた文献や知識により多彩な文化活動も展開する．香川県満濃池の修築工事では，水圧に対してアーチ型の堤防を築くなど技術指導を行ったとされている．また，中国語や梵語など語学に造詣が深く，書道では三筆の一人として高く評価された．更に，日本最初の庶民教育機関「綜芸種智院」を開き，教育の機会均等に貢献した．

承和元年（834年），国の安寧を祈るため，宮中に道場を開いて真言の秘法を修する法会（現在まで続く「後七日御修法」）を行い，翌年3月21日，62歳で高野山において入定（逝去）する．没後の

延喜21年（921年），醍醐天皇から弘法大師の諡号が与えられる．

3. 空海の著作

空海に関わる全ての著作は全体で220余部あるとされている[3]．疑わしいもの，明らかに偽書とされているものも含めての数である．空海の著作の写本，印刷，改版などは，1000年以上に渡って様々なかたちで行われており，その過程で，多くの追記，改変もなされていた．そうした多くの文献は，明治41年に長谷宝秀らが整理，検証，編集を担当し，祖風宣揚會から「弘法大師全集」として発刊された．その後数回の増補再刊が高野山大学密教文化研究所によりなされ，「篆隷萬象名義」などが追加収載された（表2）．この「弘法大師全集」は約80年間，弘法大師ならびに密教史，思想史の資料として広く宗教学の研究者の資料として使用されて来たが[5]，戦後，数多くの貴重な文献や写本が新たに発見されたため，同研究所は松長有慶を中心に全面的な改訂を行なった．全国に散らばる千点を超える資料が再精査され，可能な限り古い資料を底本として厳密な校合も行い，平成3年に『定本 弘法大師全集』が刊行された[3]．

高野山大学密教文化研究所が昭和45年に編纂した「弘法大師全集」では，空海の著作を相承（代々受け継がれる教え）部，教相（経典の分類）部，悉曇（仏教の梵字）部，遺訓部，文学部，雑部，神道部に分類している．同研究所が平成3年に刊行した「定本弘法大師全集」では概ね前分類を踏襲するものの，空海の真撰として疑いのない著作を，相承部，教相部，事相部，悉曇部，文学部として再編纂している[3]．

4. 空海による医療，医学の記述内容

空海の著作に登場する，医学，医療に関する記述は表3のとおりであり，具体性のある記述としては，薬に関するもの，鍼灸に関するもの，飲食に関するもの，呼吸法に関するもの，祈祷，祈願の効用など認知行動療法的なものなどに分類できる．施術的な記載は「鍼灸」に限られるが，当時の医療における手技的なものには鍼灸術のほか按摩導引，蛭食などもあり，典薬寮では按摩師も養成されていた[6,7]．具体的な記述例を項目別に紹介すると下記のようである．尚，ここで「文献記載

表2　空海の著作

思想等を記した代表的著述8点	三教指帰（元原稿『聾瞽指帰』）	般若心経秘鍵	聲字實相義	秘蔵寶鑰
	秘密曼荼羅十住心論	辯顯密二教論	即身成佛義	吽字義釋
詩歌・手紙・目録・経典解説など47記述	御請来目録	真言宗所學経律論目録	秘密曼荼羅教付法傳	真言付法傳
	秘密曼荼羅大阿闍梨耶付法傳	異本即身義	大日経開題	金剛頂経開題
	教王経開題	理趣経開題	真実経文句	実相般若経答釈
	仁王経開題	法華経開題	法華経釈	法華経蜜号
	梵網経開題	最勝王経開題	金勝王経秘密伽他	金剛般若波羅蜜経開題
	一切経開題	釈論指事	大毘盧遮那成仏経疏文次第	三昧耶戒序
	太上天皇灌頂文	五部陀羅尼問答偈讃宗秘論	念持真言理觀啓白文	梵字悉曇寺母扞釋義
	秘蔵記	秘密三昧耶仏戒儀	金剛界念誦次第	大悉曇章
	文鏡秘府論	文筆眼心抄	高野雑筆集	拾遺性霊集
	発揮拾遺編	聾瞽指帰序註	御手印縁起	太政官符案扞遺告
	御遺告	違告真然大徳等	違告諸弟子等	遺誡
	遍照發揮性霊集	拾遺雑集	篆隷萬象名義	

高野山大学密教文化研究所 編集・監修「定本 弘法大師全集」による．表記のほか，『開題類闕』，『大日経疏要文記』が同研究所発刊の旧版「弘法大師全集」に収載されており，勝又俊教 編「弘法大師著作全集」においても弘法大師著作として解説されている．

表3　空海著作品内の内容別医学・薬学・保健関連記述数・記述箇所

宗教思想的記述における比喩的記載	説法や修行の効果に個人差があるのは，薬や施術の場合と同様である．（23箇所） II-4，II-170，II-250，III-11，III-40，III-48，III-77，III-109，III-123，III-141，IV-53，IV-233，V-3，V-13，V-19，V-25，V-30，V-56，VII-86，VII-117，VIII-18，VIII-34，VIII-199
	仏教（特に密教）信仰の効果は薬や施術の体への効果と同様に信頼できる．（30箇所） II-4，II-7，II-65，II-251，II-255，III-11，III-113，III-123，III-132，III-137，III-141，III-143，III-143-2，IV-26，IV-45，IV-60，IV-273，V-8，V-21，V-95，V-159，VII-49，VII-50，VIII-35，VIII-104，VIII-156，VIII-162，VIII-171，VIII-204，VIII-237
	物質的な身体は有限で脆弱である．（7箇所） I-128，II-7，III-76，VII-77，VIII-146，VIII-213，VIII-214
薬や施術の効果に関する記載	薬（9箇所） II-6，VII-59-1，VII-59-2，VIII-9，VIII-47，VII-117，VII-125，VII-125-2，VIII-169
	鍼灸（6箇所） I-94，I-96，IV-183，V-4，VIII-144，*III-633
	飲食（10箇所） II-90，II-164，III-97，IV-196，V-24，VII-59，VII-69，VII-96，VII-114，VIII-120
	呼吸（10箇所） II-150，II-158，II-159，III-69，III-144，IV-327，VII-59，VII-89，VII-124，VIII-40
	祈願（7箇所） I-78，II-325，V-121. VII-96，VII-102，VII-106，VII-117
	その他（4箇所） II-4（温浴），V-126（平等），VII-125（休息），VIII-165（病態）

「記載箇所」は高野山大学密教文化研究所 編集・監修「定本 弘法大師全集」内の巻数（ローマ数字）とページ番号．同ページに2箇所記載がある場合はページ番号の後ろに「-2」と追記．「＊」マークは，高野山大学密教文化研究所 編集・監修「定本 弘法大師全集」と併載されている同研究所発刊の旧版「弘法大師全集」側にのみ記載があるもの．記載内容の該当区分が複数ある場合は，それぞれの区分で別途カウントしている．同一記載が複数の文献に存在する場合も別々にカウントしている．単に「醫王」が仏や如来を，「薬」が効果のある物を，「病」が不良な状態を表していると考えられる記述はカウントしていない．

箇所」とは，高野山大学密教文化研究所 編集・監修「定本 弘法大師全集」内の巻数（ローマ数字）とページ番号である[3]．

A）薬に関する記述

原文：白朮黄精松脂・穀實之類．以除内痾．

書き下し文：白朮・黄精・松脂・穀実の類は以って内の痾を除く．

趣旨：（道教によれば，）白朮・黄精・松脂・穀実の類を飲めば内の病を除くことができる．

文献記載箇所：VII-59

B）鍼灸など手技に関する記載

原文：四大之疾藥針所治．一心之患深法能療．

書き下し文：四大の疾は薬針の治する所，一心の患は深法能く療す．

趣旨：地水火風の四大の不調による身体の病気は薬や針で治すもので，心の患いは深い仏教の教えが上手く治療するものである．

文献記載箇所：III-633（旧版「弘法大師全集」側にのみ記載がある）

C）飲食に関する記載

原文：醍醐之味乳酪蘇中微妙第一．能除諸病令諸有情身心安樂．

書き下し文：醍醐の味は乳，酪，蘇の中に微妙第一にして能く諸病を除き，諸もの有情をして心身安楽ならしむ．

趣旨：醍醐の味は乳，酪，蘇の中で最上であり，よくもろもろの病気をいやし，あらゆる人々の身と心を安楽にすることができる．

文献記載箇所：III-97

D）呼吸に関する記載

原文：治多尋伺言息念者阿那阿波那．謂持息入謂持息出．

書き下し文：多尋伺を治するに，息念というは阿

那阿波那なり．いわく息入を持し，いわく息出を持するなり．

趣旨：心の落ち着かない人は息の出入りを整えるために呼吸法を修練する．

文献記載箇所：II-150

E）祈願に関する記載

原文：謹加持神水一瓶且勒弟子沙弥真朗奉進．願以添薬石除却不祥．

書き下し文：謹んで神水一瓶を加持して，かつ弟子の沙弥真朗を勒して奉進せしむ．願わくは持って薬石に添えて，不祥を除却したまえ．

趣旨：嵯峨天皇の病気平癒を祈願して，祈祷した水を送り，この水で薬を服用して快癒してほしいと願う．

文献記載箇所：VII-96，VIII-164

一方，医学，医療を比喩的に用いた記述は非常に多く，単語として「医王」，「薬」，「病」などは多数見られる[8]．こうした単語のほとんどは，「医王」が仏や如来を，「薬」が効果のある物を，「病」が不良な状態を表しており，文章として，医療，医学を論じているわけではない．文章として医療，医学を比喩として用いている例として，下記のような記述が挙げられる．

① 医術が利他的であることを，仏教を理解するための比喩として
「親族不予なるときに，医を迎え薬を嘗むるの誠（VII-49）」

② 医者の教えを守ることが大切なことを，仏教の教えを守ることの大切さの比喩として
「病人若し医人を敬い，方薬を信じ至心に服餌すれば，疾即ち除愈す．病人若し医人を罵り，方薬を信ぜず，妙薬を服せずんば，病疾何に由ってか除くことを得ん．（III-137）」

③ 当日の医術が信頼に足るものであることを表現して
「医門は招さざれども，疾病の人投帰す．（III-143）」

④ 唯心論的病因説
「凡そ一切の病は貪・瞋・痴の煩悩より生ず．（V-159）」

⑤ 実修業の重要性を医術に例えて
「必ずすべからく病に当って薬を合わせ，方によって服食すべし．（VIII-162）」，「妙薬篋に盈てども，嘗めずして益なし．（VIII-204）」

⑥ 相手によって薬の処方が変わることを，仏教の教え方が相手の理解度，修行の達成度で異なることの比喩として
「病原巨多なれば方薬非一なり（II-4）」，「病に応じて薬を投ぐ．根機万差なれば鍼灸千殊なり．（III-77）」，「種々の薬を施して種々の病を療したもう．（V-3）」，「性欲に多種あれば，医王薬鍼を異にす（VII-86）」，「性欲千殊にし薬種万差なり．（VII-117，VIII-199）」

⑦ 同じ薬草が服用する人や処方医の巧拙により毒にも薬にもなりうることを，仏教の教え方も相手次第で変えないとむしろ害になることの比喩として
「譬えば薬毒の迷悟に損益不同なるがごとし．（III-40）」，「妙薬は鄙人に対すればもって毒となる……医眼の覩るところ百毒薬と変じ．（V-13，VIII-18）」

5. 空海著作にみる医療，医学に関する記述の特徴

空海の著述したまとまった文章のほとんどは，当然ながら宗教論で，経典の引用が多いが，空海の広範な文献知識を反映して，儒教や道教の文献からの引用，比喩も少なくない[9,10]．講話や私信，代筆なども多いので，繰り返し類似の記述が見られる．『聾瞽指帰』を改訂した『三教指帰』[11]，『秘密曼荼羅十住心論』を要約した『秘蔵寶鑰』[12]など，長い記述でも意図的にほぼ同一内容を版を改めて執筆している場合もある．総論的な特徴として以下の事項が挙げられる．

1）密教の優越性を顕教や真言宗以外の宗派と比較して論じたものが多い．

2）行動を伴わない経典読誦のみの宗教活動の無効性を強調している．

3）受け手の理解度，人格到達度に応じて説法の方法を変える必要性を繰り返し述べている．
4）薬や鍼灸は疾病の治療において有効で信頼のおけるものであり，名医は相当な疾病治療能力を持っているという理解に基づいて記述している．
5）医学的，薬学的方法を尽くしても救えない例があることも記している．
6）呼吸法の身体的，精神的な効用が多数記されている．
7）具体的な薬名や施術名の記述は非常に限られている．
8）薬と毒との違いは服用法や服用量の差異であると理解している．
9）粗食が健康維持と精神的修養に重要であると記している．
10）醍醐（美味なチーズ様食品）や味噌（豉）を有効な食品（薬）の代表として繰り返し記しており，タンパク質や乳脂，発酵食品の摂取の効用が理解されていたと思われる．空海の時代においてはタンパク質の摂取不足が基本的にあったとも想像される．
11）香辛料や酒類は健康に良くないと捉えている．
12）祈祷の疾病治癒力に関する記載も少なくなく，原始的な認知行動療法と捉えることができる．
13）病因論的には唯神論の立場をとっている．
14）現世における生命は短くはかないものなので，その物質的，表面的な事項に大きな価値を感じることの無意味さを，麗人でも死体は醜いことを記すこと等で繰り返し強調している．

6. 空海が活躍した平安時代の仏教僧と医学・医療

本邦の医療史を広範かつ詳細に研究した新村によれば，平安時代には，丹波康頼が編纂した医学百科全書「医心方」に記されているとおり，寿命は天から与えられるという要素だけでなく，不養生により様々な病が生じることにも大きく依存するという考え方が定着しつつあった．こうした背景から人々を仏の悟りに導くだけでなく，僧侶には養生法や治療法を人々に指南する医師の役割も期待されていた．そして，医療に関する活動を主に担当する僧侶として僧医の養成活動も開始されていた[13]．

また，奈良時代から平安時代にかけて，仏教僧は基礎教育として「五明（言語学・文学など声明，工芸技術・算法暦法など工巧明，医方明，論理学を意味する因明，哲学・仏教学など内明，の五領域）」を学習し，その一部としての医方明の中で医学も学んだ．僧侶はこうした学習基盤のもとに祈祷と医療の双方に従事したので，当時の文書には仏教の治病利益を説いた記述が多数存在する[14]．

そして，平安時代の文化人である僧侶が大陸に派遣される際には，医学・医療を含む大陸の知識を広範に仕入れてくることが期待されており，空海が唐に渡った際にも，帰朝にあたって多くの書籍を持ち帰ることが意図されていた．将来すべき書は「五明」すべての領域とされてといたという[6]．

一方，古文書を深く読み解き，その中の医学・医療に関する記載を時代別に整理考察した服部は，平安時代の貴族たちの生活が栄養学的にも精神医学的にも著しく不健康であり，当時の仏教も現世利益追求的で社会不安増強に働いていたと指摘している．例えば，加持祈祷を主眼とする平安時代の密教系仏教では，「よりまし」と呼ばれる憑依された病人の関係者に病状に影響を与えていると思われる不安要素などを吐露させることにより，現在の認知行動療法的効果を得ていたと考えられ，そうした活動で仏教の医療における効能，現世利益を広報していた[15]．ただし，繁田は平安貴族社会における医療と呪術がそれぞれを得意とする専門家による二元的，かつ相互補完的なものであり，当時においては最大限の療養効果を得るための合理的な組み合わせであったと考察している[16]．

また，奈良時代の僧侶が，飢餓や疫病で野原に放置された悲惨な状況の人々に寄り添い，看病や看取りを施す看病僧としての役割も演じていたのに比して，平安時代初期に山岳での修行に重きを

置いた密教系僧侶は，最澄や空海などの宗派の領袖が，為政者周辺の治癒祈願や社会事業として困窮者の救済で役割を演じた以外は，市中での医療活動に積極的でなかった[7]．しかし，奈良時代に光明皇后が仏教の広益済民の思想のもと設立した施薬院および悲田院は平安時代に入ってからも受け継がれ，仏教系の福祉・医療施設として庶民厚生の活動を続けていた[7]．

こうした歴史的事実からは，空海自身は大陸からの医学・医療の導入や医療を含む社会貢献事業で積極的な役割を演じたものの，そうした活動が直接的に当時の市民の衛生環境改善や仏教僧の医療活動の革新・拡大に寄与したという事実はないと考えられる．しかし，森が指摘するとおり，日本の伝統的医学を考察する際には医療としての視点にとどまらず，当時の思想，哲学を考慮することが重要であり，現在の科学的・医学的根拠に基づく医療の考え方で功績や貢献度を評価することは適切でないとも言える[17]．

7. 医学，医療にも精通した“弘法大師”説の背景

空海が全国を行脚したという伝説は，高野聖を中心とする密教系修験者が全国各所で活動したことを，彼らの教祖とも言うべき「弘法大師」，「空海」の活動として言い伝えたという民間伝承に由来すると，山岳宗教，修験道等の研究者は考えている[18–20]．また，遊水池や温泉を掘り当てたという言い伝えは，空海が四国香川仲多度郡まんのう町にある日本最大級の灌漑用のため池「満濃池」の治水作業にあたり，中国で見聞した知識を提供したという「水」に関係する史実，あるいは，前記の高野聖が山中等での活動に際して発見，見聞した「湧水」「温泉」に関する情報を，山麓の人々に提供したという史実に由来するのではないかと想像されている．

平安末期から安土桃山時代までの密教系修験道と医療の関係に関して，五来は，真言密教を広め，高野山への寄付等を集めるために全国へ散った高野聖の活動に着目している．1180年頃活躍した高野聖 仏厳を例示して五来は以下のように説明している．「『玉葉』や『山槐記』に見られる仏厳で気になるのは，やたらに人の病気を診察したり治療のアドヴァイスをすることである……勧進にとって医術ぐらい有力な武器はない．いまも僧侶と医師をかねる人も少なくないが，むかしも勧進聖は本草や民間医学の知識ぐらいはもっていたようである．」．さらに，今日の緩和医療におけるスピリチュアルケアの前身として，「臨終の正念をおもんじ，15人の知識同行が病者を看病し，無常房にうつして知識同行とともに，細声に念仏または本尊の真言をとなえて往生せしめる．」のような事例も挙げている[18]．一方，山岳信仰の研究者，鈴木正崇は，「（1141年『羽黒山縁起』の記述によれば）聖に祈祷を頼んだところ，不思議なことに病人の家が火事になり，驚いた病人が思わず走り出して，腰痛が嘘のように治った．」，「羽黒山の秋峰修行『十界修行』では数息観で呼吸を整える．」，といった例をあげ，密教系修験道の活動を紹介している[19]．

織田信長による高野聖の掃討や江戸時代の檀家制度推進による高野聖の活動制限により，彼らを代表とする密教系修験の活動は縮小したが，山岳信仰そのものは衰退することはなく，江戸末期の活動として，鈴木は「1803年ごろ，泰賢の座法は御座の時に信者と対面して加持を行い，託宣して薬草を出すという御座で八海山独自とされる．」，「1800年ごろ活躍した修験の一心は，御嶽講中，神仏の宣託に留まらず病名判断や薬草を処方する『神薬差し出し』など独自の御座を開発した．」などの例を挙げ，密教信仰と当時の医療の関係を解説している[19]．

修験者が用いた薬として広く知られているものに，山上ヶ岳の山麓の洞川や吉野山で，胃腸病をはじめ万病にきくとされる「陀羅尼助」がある[20]．黄檗の生皮やセンブリの根を煮て固めた薬である．霊山の御師は黄檗などを原料として作った薬を持参することが多かった．類似のものとして，大峰山の陀羅尼助，立山の反魂丹や熊の胆，伊吹山の艾，木曾御岳の百草，伊勢の朝熊ヶ岳の万金丹，英彦山の不老丹などがある．ちなみに全国に広く知られている富山の反魂丹を主要なものとす

る置き薬の方法は，立山修験の配薬に淵源があるとされている．また，木曽御岳の普寛は山中の霊薬百種を採集して煎じて飲めば霊験があると村人に教え，弟子の寿光が生薬に調合したと伝えられている[19]．その他にも，山岳霊場と薬は密接な関係があり，石鎚山の陀羅尼助や伯耆大山の煉熊丸などキハダを使う胃腸薬は，信仰と相俟って効果を高めるとされた．なお，万能薬とされ，各地で頒布された「陀羅尼助」は，胃腸薬，強壮剤，痛み止めに用いられるだけでなく，僧侶が陀羅尼の呪文を読むとき，口に含んで睡魔を追い祓ったと言われ，名称はこれに由来するという説がある[19]．

8. おわりに

空海が日本国内での勉学ならびに修行，そして中国への渡航により，さまざまな医学的，薬学的知識を得たことは間違いないと考えられる．そして，本業である真言密教の伝道に際して，当時においては十分に信頼するに足りると考えられた医学，薬学，保健学の健康管理，健康長寿に関する効能を，宗教上の講話の例え話として頻繁に用いたことも著述から伺える．しかし，国内各所に残る弘法大師の活躍話の多くは，空海の密教思想を後継した高野聖や山岳修験者の活動に由来すると考えられる[21]．

謝　辞

本原稿作成にあたり，地名検索に関して国土地理院にご助言を頂きました．また，真言宗高野山別格本山慈眼院 橋爪良真住職に宗教家の視点から記述内容をご確認頂きました．ご協力に厚く御礼申し上げます．

参考文献

1）篠原資明．岩波新書 空海と日本思想．東京：岩波書店；2012．P. 95
2）司馬遼太郎．中公文庫 空海の風景 上・下．東京：中央公論社；1978．P. 7
3）空海（高野山大学密教文化研究所 編集・監修）．電子版 弘法大師全集（「(弘法大師全集 増補三版（全八巻)」ならびに「定本 弘法大師全集（全十二巻)」を電子版に合冊）．大阪：小林写真工業株式会社；2011．P. 1–89（定本弘法大師 首巻内）
4）由良弥生　王様文庫「眠れないほど面白い空海の生涯」 三笠書房　東京，2019．P. 16
5）勝又俊教 編．弘法大師著作全集　第一巻・第二巻・第三巻 修訂第9版．東京：山喜房佛書林；1992（1970初版）．P. 1
6）新村　拓．日本仏教の医療史．東京：法政大学出版局；2013．P. 58
7）服部敏良．平安時代医学の研究　吉川弘文館　東京 1955．P. 44, 125
8）空海（宮坂宥勝 監修）．ちくま学芸文庫 空海コレクション 1–4．東京：株式会社筑摩書房；2004–2013．P. 270
9）空海（加藤精一 編）．角川ソフィア文庫 般若心経秘鍵．東京：株式会社KADOKAWA；2011．P. 116–128
10）空海（加藤精一 編）．角川ソフィア文庫 即身成仏義，声字実相義，吽字義．東京：株式会社KADOKAWA；2013．P. 142–144
11）空海（加藤純隆，加藤精一 訳）．角川ソフィア文庫 三教指帰．東京：株式会社KADOKAWA；2007．P. 179–183
12）空海（加藤純隆，加藤精一 訳）．角川ソフィア文庫 秘蔵宝鑰．東京：株式会社KADOKAWA；2010．P. 267–278
13）新村拓．健康の社会史．東京：法政大学出版局；2006．P. 16
14）新村拓．日本医療史．東京：吉川弘文館；2006．P. 41
15）服部敏良．王朝貴族の病状診断．東京：吉川弘文館；1975．P. 46
16）繁田信一．平安貴族社会における医療と呪術：医療人類学的研究の成果を手掛りとして．宗教と社会 1995；1: 77–98
17）森　忠重．日本の伝統的医療の世界について：祈祷呪法の世界から医療の世界への展開．医学哲学 医学倫理 1992；10: 25–45
18）五来　重．角川ソフィア文庫 高野聖．東京：角川学芸出版；2013．P. 140–146
19）鈴木正崇．中公新書 山岳信仰．東京：中央公論社；2015．P. 51–239, 285
20）宮家　準．講談社学術文庫 霊山と日本人．東京：講談社；2016．P. 288–307
21）高村　薫．空海．東京：新潮社；2015．P. 122–129

Medical Descriptions by Kukai

Masaru TOBE and Shigeru SAITO

Department of Anesthesiology, Gunma University Graduate School of Medicine

The Koyasan University Institute of Esoteric Culture re-organized Kukai's documents into 55 works in 1991. Among them, there are 60 parts that describe medicine, pharmacy, etc. as metaphorical descriptions in religious ideological descriptions, and 46 parts that describe specific medicines, treatments, nutritional management, etc. It is conceivable that Kukai believed that the effects of medicine and pharmacy at that time were sufficiently reliable regarding health care and longevity. He frequently used them as an analogy to religious lectures. However, there is no definite evidence that Kukai himself traveled all over the country to spread his knowledge of medical care and health, and such legends are thought to be derived from the activities of Koya-Hijiri missionaries and mountain practitioners who succeeded Kukai's Esoteric Buddhism.

Key words: Kukai, Kobo Daishi, Shingon sect, Esoteric Buddhism, Koya-Hijiri missionaries